

平成 1 6 年度国土施策創発調査

半定住人口による多自然居住地域支援の 可能性に関する調査報告書

要 約 編

平成 1 7 年 3 月

農林水産省農村振興局

はじめに

近年農村地域においては高齢化・都市化・混住化が進行するなか、今後農地・農業用水等の資源の維持保全に支障をきたす恐れがでてきている。一方で、農業・農村の持つ多面的機能に対する都市住民や非農家の理解・協力を得て資源の維持保全を行っている事例が見られる。

このような中、都市住民等による農山漁村等へのマルチハビテーションや長期・反復滞在といった半定住の新しい動きが見られ、このような新しいかたちでの都市住民等の農業・農村における存在が、農地・農業用水等資源の維持保全に果たす役割が重要性を増していくことが考えられる。

このようなことから、上記のような半定住の新しい動きが多自然居住地域の維持・発展に果たす役割や、全国に普及する可能性を明らかにするため、農村地域における先進事例の調査・取材を行うとともに、併せて優良事例の調査結果をインターネットホームページにより発信するための調査「半定住人口による多自然居住地域支援の可能性に関する調査（先進事例調査及び情報発信）」の成果をまとめたものである。

調査にあたり、関係者及び関係機関の過分なる協力をいただいたことに謝意を表すものである。

全国水土里ネット（全国土地改良事業団体連合会）

目 次

はじめに

1．業務の概要

2．現地調査

- 1) 地区の選定方針
- 2) 調査地区の決定
- 3) 現地調査地区の調査結果（各地区の概要）
- 4) 現地調査の全体総括

3．Webサイト作成

- 1) 目的と基本方針
- 2) Webサイトの構成
- 3) 各パーツの内容（サイトマップ）
- 4) Webサイト構成のまとめ

4．全体のまとめ

1．業務の概要

本業務は、中山間地域等を含む農山漁村等において、今後、定住人口の急激な低下が見込まれる中、都市住民等による農山漁村等へのマルチハビテーションや長期・反復滞在といった半定住の新しい動きが生じている。こういった動きが多自然居住地域の維持・発展に果たす役割や、全国に普及する可能性を明らかにするため、農村地域における先進事例の調査・取材を行うとともに、併せて優良事例の調査結果をインターネットホームページにより発信を行うための web ページを作成する。

1．先進事例地区の調査

今回は先進地区として3地区（因幡堰地区、市之枝地区、大菊地区）を選定し、具体的な取組について事例調査を実施した。

2．web サイトの作成

具体的な取組事例を紹介するとともに、農地・農業用水等の資源保全について国民的理解を促進するための各種工夫を盛り込んだ web ページを作成した。

2 . 現地調査

1) 地区の選定方針

先進事例地区については、既存文献等から農山漁村等において地域づくり活動を実施している地区の中から、都市住民との交流に積極的に取り組むと共に、これら都市住民の協力を得ながら農地や農業用水等の地域にある資源の保全に取り組んでいる地区を抽出し、全国的に情報発信するに当たって地域バランスを考慮して選定する。

2) 調査地区の決定

抽出に当たっては、21世紀土地改良区創造運動、資源保全活動事例等の資料のなかから選定した。

資源保全Webページの作成に関する事例調査地区(候補地12地区)

都道府県名	地区名	市町村名	地区概要
山形	いなば	藤島町	
三重	立梅用水	勢和村	
熊本	大菊	菊陽町	
千葉	印旛沼	佐倉市	
北海道	北斗	鷹栖町	
山形	三郷堰	天童市	
群馬	吹上	笠懸町	
富山	末三賀中部	立山町	
岐阜	市之枝地区	羽島市	
滋賀	丁野	湖北町	
兵庫	見谷	稲美町	
広島	大朝町	大朝町	

上記候補地区の中から、具体的な取組の事例として調査可能な地区として
因幡堰地区(山形県藤島町)
市之枝地区(岐阜県羽島市)
大菊地区(熊本県菊陽町)
の3地区を選定した。

3) 現地調査地区の調査結果(各地区の概要)

事例地区として現地調査を実施した地区の概要は以下のとおり。

因幡堰地区

因幡堰地区は、庄内平野の中央部に位置する藤島町にあり、「水土里ネットいなば」を中心に、大きく2つの資源保全活動に取り組んでいる。

一つは、藤島町内をの中心部を流れる資源である用水路「大堰」の復古へ向けた取り組みで、もう一つは、都市部の人々が参加する「農業農村体験」に取り組んでいる。

「大堰」復古の取り組みは、地域で暮らす農家および非農家に資源である農業用水の重要性を認識してもらうと共に、地域の財産として大切に保全していくことの理解を促進している。また、「農業農村体験」は、農業や農村に触れる機会のない都市住民に様々な農作業などを楽しんでもらうことで、農業や農村に対する理解を深めてもらい、都市と農村地域との交流を促進し、半定住型交流につながっている。

<活動の拠点となっている藤島町内を流れる「大堰」>



<農業体験する都市住民達>



<地元の子供達と大堰とのふれあい>

市之枝地区

市之枝地区は、岐阜県羽島市の農村地域にあり、「市之枝地域づくりネットワーク協議会」を中心に様々な活動が取り組まれている。

本地区では、休耕田を利用した全国でも類を見ない 6ha ものコスモス畑では、一面に花咲くコスモスを見ようと岐阜市内からはもちろん、名古屋圏や三重県からも多くの人々が訪れ、地域と都市住民との交流の場として、今では欠かせないイベントとなっている。また、転作作物である牧草を畜産農家の堆肥と交換することで、有機減農薬栽培米であるクリーン米「ハツシモ」の栽培に取り組み、大きな反響を得ている。

こうした交流活動の一方で、農地や農業用水を守るため、地域住民による排水路のゴミ拾い、泥上げや草刈りなどの清掃も行っており、最近では地域の楽団や野球クラブに所属される方々の参加も得て、平成 16 年 2 月の清掃では参加者は 250 名におよんでいる。

清掃の後に開かれる地区の交流会では、雨の中カッパを着て清掃に励んだ人々が中高年、児童と 3 世代にわたって集まり、あたたかな料理を手に和やかに語り合うなど地域における世代を超えた交流につながっている。



< 休耕田を活用したコスモス畑 >



< 都市住民も参加した水路清掃 >

大菊地区

大菊地区は、阿蘇山から有明海にそそぐ一級河川・白川の中流域にあり、阿蘇山の火山活動でできた地層のため、水分を蓄えやすい性質を持っている。この特性により、白川中流域で涵養された地下水は下流域の熊本市内の生活用水や工業用水の水源として利用されている。しかし最近に見られる都市化の進展や米の生産調整などによってかん養域は減少し、これにともなって地下水のかん養量が下がり、熊本市では水源である地下水の不足が深刻化してきている。大菊地区では、この白川中流域の特性を活かして、地下水の涵養につながる湛水農法に着目したさまざまな取り組みを行っている。

このなかで、都市との交流をとして、平成 15 年度から「田んぼの学校」が始まっている。地元や熊本市内の小学校などから参加した生徒達は、田植えや魚のつかみ取りなどの体験を通じて交流を深めるとともに、併せて九州東海大学・市川教授による分かりやすい地下水かん養についても説明し、子供たちからは、「自分たちの身近にある田んぼの水が、熊本の貴重な地下水になっていることに驚いた。農地や農業用水の大切さを学びました。」といった感想が出るなど、興味を持つきっかけを作っている。

また、都市住民が参加する「農業体験」イベントでは、熊本市内の6家族が月に一回のペースで半年間、大津町の水田で田植えから収穫までを体験しました。農業を通して地下水の恵みや地下水かん養の大変さについても学んでもらっている。こういった都市に住む農業体験者や田んぼの学校に参加した人々が、農業や農村の役割・重要性について広めていってくれることや農村地域へ訪れる機会の増加することに期待が持たれている。

平成16年2月には、生産者や消費者を主体とする団体「豊かな地下水を育むネットワーク」が設立され、湛水農法による農作物の栽培とその商品化に取り組んでいる。湛水農法は、田畑に水を張ることによって土壌中の害虫を駆除したり連作障害を抑制するなど、農業面での効果が確認されているが、費用や手間の面でリスクもあり、取り組む農家は決して多くない。しかし水を張った農地は、減農薬栽培が可能となり、多くの人が必要としている地下水も育むなど、質の高い農作物の生産と地下水の保全を両立できるメリットがあり、新しい農作物ブランドとして「水の恵み」の立ち上げ、湛水農法による「地産地消」を目指した水循環型営農に取り組んでいる。

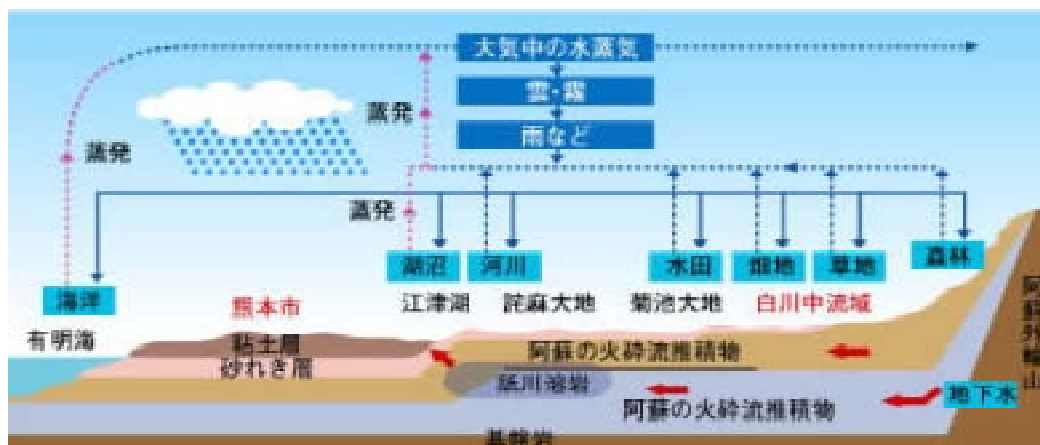
(1) かん養域

雨水などが地下に浸透しやすく、地下水をつくることのできる地域を言います。地下水かん養とは、こういった地域に水を入れて地下水を育むことです。

(2) 湛水農法

ここでは作付け前の畑や、転作した水田に水を張ることを湛水と言い、湛水後に農作物をつくることを湛水農法と言います。水を張ることで土壌中の害虫駆除などの効果が期待できるため、農薬を減らすことができます。

< 白川中流域における地下水涵養のしくみ >



< 湛水農法実施水田 >



< 地下水涵養の説明 >



< 水の恵み商標 >

4) 現地調査の全体総括

各地域における取り組みは、いずれも都市住民と農村地域の住民がイベントなどのさまざまな機会を通じて交流し、都市住民の農村地域へ関心を高める取り組みがなされている。このような取り組みにより、都市住民が農村地域へ訪れる機会が増加するとともに、徐々にではあるが、長期的な滞在にもつながるものと想定される。

3 . W e b サイトの作成

1) 目的と基本方針

今回の P R 用 W e b サイトについては、以下の目的を持って作成する

農地・農業用水等の資源保全施策への共感

マスコミ記者への訴求

シンポジウムや説明会での活用

意見募集やアンケート調査

2) W e b サイトの構成

テーマ「水土里清し国づくり」

施策の訴えかけではなく、資源保全施策の一般向けリーフレットとの整合を図り、日本の美しい農村を守るために必要なこととしてのイメージ訴求

訴求内容

- ・農地・農業用水等の資源とは
- ・農地・農業用水等の資源の現状
- ・資源保全施策への取り組み
- ・資源保全の活動事例の紹介
- ・水土里豊かな日本を次世代に
- ・ご意見コーナー

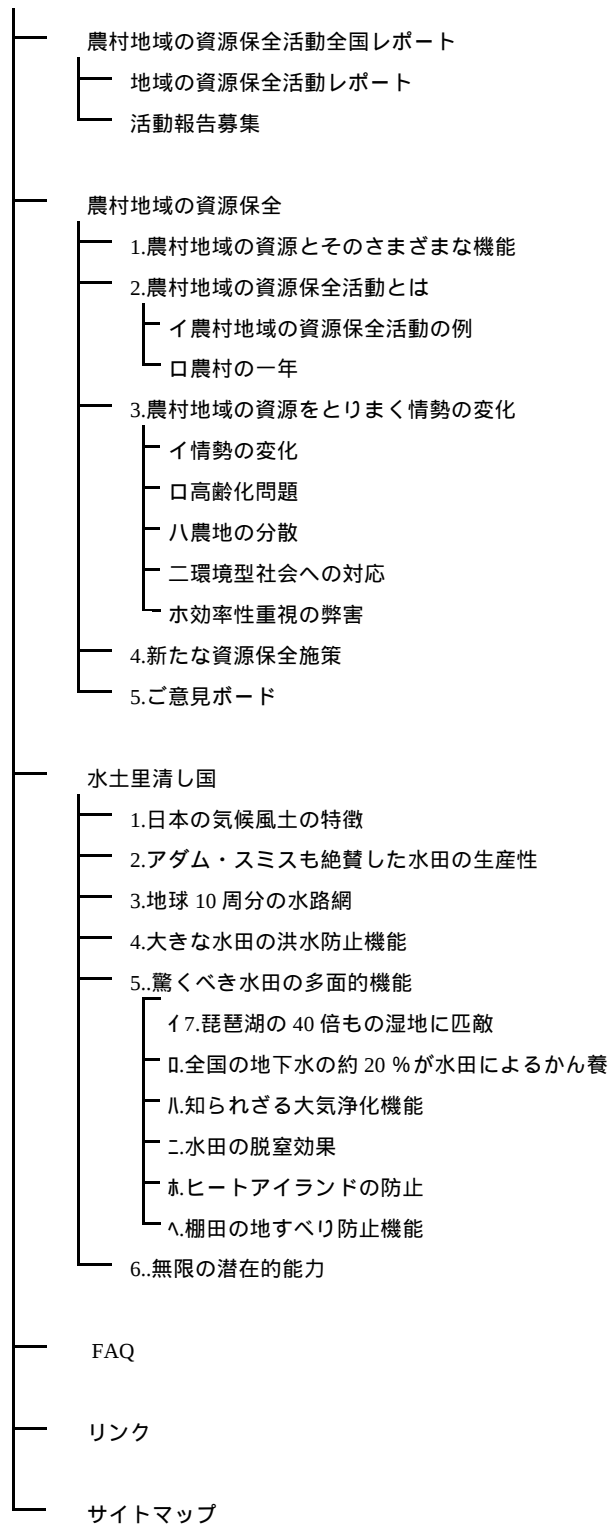
各ページ構成

上部に横列のメインメニューを設置

また、ページの内容によっては、左右の縦列又は下部にサブのメニューを設置

3) 各パーツの内容 (サイトマップ)

○ トップページ



4) Webサイト構成のまとめ

今回作成したウェブサイトの制作にあたっては、より多く国民に閲覧してもらえるようSEO戦略（検索ページでの上位表示）としてPR対象を明確にするとともに、対象者が利用すると想定される検索ワードを整理して、各ページに多くの単語配置をおこなった。

PR対象	想定検索ワード（例）
マスコミ記者	農業基本法、食料・農業・農村基本法、新基本計画、農村政策、農業政策、資源保全施策、景観法
農家や水土里ネット関係者	資源保全施策、農業用水、農地保全、維持管理、都市住民、デカップリング、農地法改正
オピニオンリーダー	農業改革、農業基本法、新基本計画、農水省、新しい施策 農業環境、資源保全
一般市民	ため池、里山、国土保全、用水、農村、将来、循環型社会、 田園社会、農地資源、都市住民

また、資源保全施策に対する共感を得るために、情感やイメージとして訴えかけるような画面とし、また分かり易く洗練されたデザイン構成とすることに配慮した。

< W e b ページの出力 > (C D - R O M 参照)

4．全体のまとめ

今回の調査では、全国各地の農村地域において各地域にある農地や農業用水を活用した都市住民との交流が積極的に取り組まれている実態が明らかになった。

これらの取り組みは、大人から子どもまで幅広層を対象として実施されている。また、実際の取り組み内容は、地域の特性が反映されたものとなっており、それぞれの地域の身の丈に応じて工夫が凝らされている。このため、現在の取り組みが無理なく継続していくことが期待できると共に、このような継続した取り組みが将来的な都市と農村の交流を定着化させる重要な要素となることが十分期待できる。

今後は、このような活動をさらに多く地域に広げていくことが、半定住人口の増大に寄与すると共に、農村地域の維持発展に貢献することにつながるものと期待できる。

また、今回の調査の結果である取組事例についてWebページを通じて国民に広く情報発信を行うことで、現在、取り組みの途上にある全国の各地における取り組みの芽を開花させる一助となったものと思慮する。